



「空を見る」

平沼洋司 文, 武田康男 写真
筑摩書房, B6判, 158頁,
1,400円(本体価格)

文章のうまさでは定評のある平沼さん(宇都宮地方気象台)と、今年の「天気」2月号の「気象談話室」で雲や光学現象の写真撮影のノウハウについて書かれた武田さん(千葉県立我孫子高校)による本である。

1つの現象に関する文章と写真が、それぞれ見開き2ページで示され、それが以下の37の現象について掲載されている。

初日の出、朝焼け雲、彩雲、光冠、光芒、光輪、ブロッケン現象、太陽と月のかさ、寒冷前線*、乳房雲、くらげ雲、吊し雲、笠雲と吊し雲、積乱雲、雷、幕電、驟雨、虹、巻雲、飛行機雲、幻日、露、火山噴火後の夕焼け、波状高積雲、青空、けあらし、凍雨、太陽柱、オーロラ、日本海の雪雲、影富士、白虹*、波状雲、雲海、地球影、蜃気楼、薄明(*の写真は海老沢次雄さん(甲府地方気象台)撮影)

この本は科学雑誌「日経サイエンス」に3年半続いた連載をまとめたものである。毎月美しい写真を厳選し、文章を良く練って仕上げられたものであろう。

平沼さんの縦書きの文章は、現象の解説であるとともにエッセー的である。古典や童謡が引用され、語源や古いエピソードにも触れられている。平沼さんは、後書きに次のように書かれている。「問題は、ビジュアルページは、とかく写真だけを見て文章は読まれないことが多いということだった。添えてある文章を、いかにして読んでもらうか、その都度格闘した。それには、文章にも驚きと感動、発見とわかりやすさが必要ではないかと、毎回主題の雲をめぐる話題を生活から文化、歴史などあらゆる分野に求めた。…」同誌の中でこの記事は「コーヒープレイク」的な位置づけであったそうで、なるほど読んでいるうちに理学書でなく文芸書を見ているような気分になってくる。

また、これだけのきれいな写真を、高校教諭という仕事の合間に数多く撮影された武田さんの不断的努力は大変なものであろうと敬意を表す。思わず「天気」2月号の「気象談話室」を読み返してみた。

これと似た趣旨の本には、少し古いが「カラー雲～そ

の生態と天気予想」(随想/新田次郎, 解説/山本三郎, 1968, 山と溪谷社)がある。ただし、新田さんの随想には「私」(新田さん自身)が多く出てくる。また、山本さんの解説はほとんどが気象学的なものである。それに対して平沼さんの文章では、客観的な表現で科学・文学・歴史など多面からの解説が試みられているという違いがある。

ところで二つ気になったことがある。一つは「影富士」という項目である。従来は、朝または夕方富士山頂や中腹に立ったとき、眼下の雲海や地面に伸びる富士山の影を影富士と呼んでいたと思うが、ここでは富士山の向こうに太陽があってその影が手前のスクリーン状の塵に映ったものをそう呼んでいる。「影富士」という言葉が二つの異なる現象を指すことは、今後混乱を起こす心配がある。なお、「気象談話室」ではほぼ同じ写真が「空に浮かんだ富士山の影」と名付けられ、月刊誌「気象」No. 453及び同No. 507では異なる日時に撮影された同様の現象が「二重富士」と呼ばれている。また、この現象が見られる条件として撮影場所が富士山から120 kmと遠く離れていることが挙げられているが、前述の「気象」によると1994年10月の写真は10 kmしか離れていない富士宮市で撮影されているので、遠く離れていることは現象が見られる条件として適当ではないと思われる。二つ目は、「むら雲」という言葉が、本書の「朝焼け雲」及び「波状高積雲」の項では高積雲として用いられ、一方、「乳房雲」「くらげ雲」及び「雲海」の項では層積雲として用いられていることである。ちなみに「【最新】気象の事典」(監修/和達清夫, 1993, 東京堂出版)によると、「むら雲」は高積雲の呼称とされている。

さて、この本を誰に勧めるか? この回答を、私はこれまで武田さんがご自分の写真を駆使して出版された2冊の本と比較して次のように求めた。「空の色と光の図鑑」(文/斎藤文一, 写真/武田康男, 1995, 草思社)は気象光学現象を科学的に調べたいときに文字どおり図鑑として用いる。「雲のかお」(武田康男, 1998, 小学館文庫)は光学現象を含む雲の様々な表情を気軽に楽しむ写真集。それに対し本書は、気象関係の仕事に従事している人や気象に関心を持っている人が、コーヒークップを片手にふだんあまり見られない美しい写真を見、広い観点で書かれた解説文を読んで、気象への夢とロマンを呼び起こす書。こう位置づけてみたが、著者の意図と合っているだろうか。

(気象研究所 山内豊太郎)